近代仏教者の中でも屈指の人物、清澤満之が
宗門改革運動に奔走していた時、
同志とともに発行した機関誌を全号復刻。
広範囲に取り上げられている論題は、
宗派史を超えて明治の仏教界、思想界の出来事として
位置づけていくための重要資料である。

教界時言

（きょうかいじげん）

清澤満之（西方寺所蔵）

復刻版

全3巻　一八九六年一〇月～一八九八年三月

体　裁　A5判・B5判／上製
総約900頁

解　説　福島栄寿（大谷大学文学部教授）

推　薦　佐賀枝夏文（大谷大学名誉教授）
島薗　進（上智大学教授・東京大学名誉教授）

揃定価　54、000円＋税

ISBN978-4-8350-7829-8

不二出版

復刻にあたって

明治二〇年代の仏教界は、西洋化の波に危機感を抱く僧侶たちが改革に立ち上がった時代であった。真宗僧・清澤満之（一八六三年～一九〇三年）もまた、真宗大谷派において、そうした改革を担った人物であった。

一八九五年、満之は、教団改革運動の中心的役割を果たすことになる。この運動は、教団の巨大負債の償却を終え、また両堂再建が成ったという時期において、宗門の柱となるべき教学の不振などへの危機感が背景にあった。翌年、満之は五名の同志と教界時言社を設立、「教界時言発行の趣旨」を巻頭に掲げ、機関誌『教界時言』を創刊した。そこには、「我大谷派をして其積弊を掃蕩して、前途の方鍼を確定し、大谷派が当に為すべきの本務を為すことを願いとすると示されている。

『教界時言』は、宗門内外に大きな影響を与えていく。創刊号は発行当日に五千部を売り尽したという。急激な運動の広がりのなかで、真宗中学・大学の学生たちが運動に巻き込まれるのを心配した満之は、第三号に「革新の要領」を掲載し、「徒らに唯破壊これ事とし風波を平地に起して以て自ら快と為さん」とするのではないとし、改革運動の目的が「教学」にあることを明示した。だが、運動は長く続かず、また運動を阻止する動きも盛んになる。現実を目の当たりにした満之は、あるべき宗門を実現する方法を問い直すことになった。第一四号から性格を変え、課題を宗政改革から教界の改革へと方針転換させた。だがそれは、革新の願いを後退させるものではなく、教界の現実を見据え、仏教の本来性を回復しようとする緊張感を持ったものであった。それでも『教界時言』の購読数は減少し、第一七号（一八九八年三月）で廃刊した。このように『教界時言』は、改革運動の始終を辿ることが出来る格好の資料である。

何より、大谷派の運動を、宗派史を越えて、明治の仏教界、思想界の出来事として位置づけていくための重要な資料である。

改革運動の頓挫を機に、満之は改めて宗門を問い直し、仏教徒としてなすべきことは信念確立の修養であり、宗教的精神の開発であることを自覚する。その強い信念は、後の「浩々洞」開設、『精神界』発刊、精神主義運動の展開のエネルギーとして開花することになるのである。

『教界時言』は既に総目次や記事の一部が翻刻出版されているが、研究機関において全号を原本所蔵している箇所はなく、国立国会図書館も一号も所蔵していない程、極めて貴重な資料である。『教界時言』全号を通覧できることにより、廃仏毀釈や西洋文明の流入によって大きな打撃を受けた仏教界の情勢を再認識できるであろうし、清澤満之たちが精神主義運動に込めた願いを読み解いていく手がかりとなることを確信している。

清澤満之関連年表

一八六三　六月二六日、尾張藩士徳永永則・タキの長男として、名古屋黒門町に生まれる。
七四　愛知外国語学校（一二月、愛知英語学校と改称）に入学。
七七　愛知英語学校廃止され、五月愛知県医学校に入学。九月退校。
七八　二月、覚音寺衆徒として得度（法名釈賢了）。三月、東本願寺育英教校入学。
八一　前年東京留学を命じられ、この年、一月東京大学予備門第二級に編入学。交友に岡田良平、澤柳政太郎、上田万年ら。
八三　東京大学文学部哲学科入学。井上円了らが創設した哲学会に参加。
八七　二月、『哲学会雑誌』創刊、第五号まで岡田良平と編集にあたる。七月、哲学科卒業、大学院に入り宗教哲学を専攻しながら、第一高等学校でフランス史を講義。
八八　九月、井上円了による哲学館（現・東洋大学）創設に評議員として参加、心理学、純正哲学を講義。この頃東京本郷西片町に居を構え、郷里より両親を迎える。前年東本願寺法嗣の命により京都に赴き、この年七月、真宗大谷派が運営を依頼されていた京都府立尋常中学校校長に赴任。
八九　八月、三河大浜・西方寺の清澤やすと結婚。人見忠次郎らと宗教学術に関する研究会「理事会」を始める。
九〇　一〇月、真宗大学寮で西洋哲学史を講義。七月、校長職を稲葉昌丸に託す。この頃より、剃髪しモーニングを法服に変えるなど行者生活始める。
九二　稲葉昌丸、井上豊忠らと教学の独立を主張、建策。行者生活はさらに徹底、ミニマム・ポシブルとみずから呼ぶ生活実験に。
九三　大谷尋常中学開設にあたり校長兼大谷派教学顧問として澤柳政太郎を迎え、学制改革の計画を練る。
九四　四月、結核と診断され、須磨・垂水に転地療養。
九五　七月、療養地より帰洛、南条文雄・村上専精らと寺務改正の建言書を提出、宗教の根本方針を教学に置くべきことを建言。この前後、清澤姓を名乗る。
九六　一〇月、稲葉・井上・今川覚神ら五名の同志と洛東白川村に移り住み宗教改革運動を開始。『教界時言』を創刊。
九七　一月、本山寺務革新請願書提出、二月、大谷派事務革新全国同盟会を結成するが、運動の主唱者として翌日除名処分。一一月、同盟会解散。
九八　三月『教界時言』廃刊。四月除名処分を解かれ妻・子どもとともに西方寺に入る。
九九　六月、新法主の命により東京本郷森川町の近角常観の留守寮に入る。以後新法主の補導にあたる。
一九〇〇　一月、月見寛了、太田祐慶らと、真宗大学建築係に任命される。一〇月、真宗大学を卒業した暁烏敏、佐々木月樵、多田鼎らと森川町で共同生活を始め、浩々洞と名付ける。
〇一　一月、浩々洞より『精神界』発刊（一八年廃刊）。
〇二　六月、浩々洞を本郷東片町に移転。この年、妻と長男を亡くす。真宗大学生の主幹排斥運動の責を負って学監を辞任、一一月、大浜西方寺に帰る。一二月、浩々洞を本郷曙町に移転。
〇三　四月、三男亡くす。六月六日歿。

推薦します

近代日本における宗門改革運動の足跡

佐賀枝夏文

日本の近代仏教教学樹立の淵源に、清澤満之その透徹した学問と信仰の姿、そこに集った同志の足跡がある。近代における宗門改革運動は、教界時言社から出版された機関誌『教界時言』の、清澤満之をはじめとする論考の筆致にみることができる。

明治大正期の機関誌刊行物は、その多くが失われており、さらに、紙面劣化の状態にあり整備が急がれる。ここに、機関誌『教界時言』が復刻をされ、その全貌をみることができた。真宗大谷派の宗門における教学研究の基盤の一翼として、また、日本仏教における近代思想史の研究に資することは誠にうれしいことである。

周知のことではあるが、明治期、怒濤のような西洋化の渦中で清澤満之は、真宗大谷派の宗門改革に心血を注いだ。その歩みは、京都白川の教界時言社に結集したことに端を発し白川党と呼ばれた。清澤満之の改革運動は、紆余曲折を経て「教学」へと注がれ、その流れが「浩々洞」そして『精神界』の出版刊行、そして精神主義運動へと結実することになる。清澤満之、そして精神主義は、真宗大谷派はもとより日本仏教の近代のゆるぎない立脚地となって現在も光彩を放っている。

戦後、清澤満之、『教界時言』の一般への周知は、一九六九年から一九七〇年代半ばにかけて中央公論社から出版された『日本の名著』シリーズ（全五〇巻）の第四三巻「清沢満之　鈴木大拙」の刊行が契機となった。この『日本の名著』は、日本の思想文化を体系化した遠大なものであった。そのなかに、『教界時言』三篇の論考が掲載されている。

このたびの『教界時言』復刻刊行は、宗門関係者はもとより、多くの研究者に資する重要な役割を果たすにちがいない。

（大谷大学名誉教授）

近代仏教の理解のみならず、現代仏教の課題に大きな示唆

島薗　進

仏教教団は近代化のチャレンジをどう受け止めたか。昨今、「近代仏教」研究が活性化し、新たな視角からの力強い研究が次々、刊行されている。こうした研究は、現代仏教のあり方そのものを省みる意欲とも関わっている。人びとが仏教に道を求め、仏教と社会の関わりのあり方にも関心が寄せられるようになってきた。

「社会参加仏教」というような言葉も期待とともに語られる機会が増えている。こうした観点からも近代仏教の見直しが進んでいる。

近代仏教の特徴を理解しようとするとき、真宗大谷派は一つの焦点となる。伝統仏教を踏まえ乍ら近代宗教思想としての深みを獲得したという点で、清澤満之と「精神主義」の運動は重要である。そこで、『精神界』（一九〇一～一九一八年）がまず注目される。

そこには内面性を重視する知識人の宗教的思考が、濃密に表出されている。しかし、それに先立つ時期、清澤満之らが「教学」の振興を掲げて、教団改革運動に立ち上がっていた。この運動の機関誌的な意義をもったのが『教界時言』（一八九六～一八九八年）である。

ここで取り上げられている諸問題は、単に真宗大谷派内部の改革運動を理解するのに資するだけではない。取り上げられている論題は広範囲に及ぶ。明治三〇年代前後の日本の仏教界が直面していた問題を「教学」的に捉えようとするさまざまな試みがある。

近代仏教理解という点からも、現代仏教の課題を考えるという点からも多くの示唆を得ることができる資料の復刻を喜びたい。

（上智大学教授・東京大学名誉教授　宗教学）

内容見本

●第三号（一八九六年一二月）

第參號　寄書

寄書

教界時言の餘白を藉りて哲學館出身大谷派僧侶諸君に檄す

井上圓了

顧ふに余が哲學館を創立せしより茲に十星霜、其間に於ける入學者の數を計ふれば、實に館内員二千人、館外員壹萬五千人の多きに至れるを見る、而して其中一半は教育家、一半は宗教家にして、大谷派の僧侶は凡そ其宗教家の五分一の多きを占むるものゝ如し、即哲學館入學者中大谷派僧侶に屬するものは、館内員に二百人、館外員に壹千五百人を有するの割合なり、今や我宗教界の實情何ぞ圖らん、余をして此篇を享して本館出身中、殊に此壹千七百人の諸君に向て、一言するの止むを得さるに至らしむ、諸君幸に之を諒せよ。

今や吾大谷派の命脈は將に旦夕に迫らんを者は、自ら其責任のある所を忘れ、誤りの責を　法主臺下に歸せんとす、古より人臣動もすれば、褒龍の袖に隱れて其責を避け家を以て怨府となし、以て天下を失はしむ蓋し世の公德を害する、天下之より大なる若し佛者にして、之に類する者ありとせば鳴らして其罪を責めて可なり、今の大谷派に斯の如し、諸君にして若し一片の護法心あらば、決して之を不問に附すべからず、の形勢を察するに、條約改正も大半其局を地雜居も其期已に近きに在り、然るに我は、依然として舊習を守り、姑息苟安以とりす、外觀は稍時勢に伴ふて改新の方針のゝ如きも、其内情を察するに、社會の進ると殆と三十年なり、百事未だ改新の緒て、其謂する所の政略は、適さ本山自滅らざるはなし、之を以て將來を卜するに、を滅す者は、今日の當局者なりと斷言し凡そ物の亡ふるは、亡ふるの日に亡ふる若し今諸君の父諸君の母にして、宿痾徒年來の積弊内是時に當りて、一たび改末寺信徒は論て止まず、早れ恰も德川末に異ならず、出てしものな一身に任じ、年一年より多と寸暇を餘さ宗の興廢、一かに清澤諸氏せんと欲するに因り、余はに代りて一大さるなり。抑も、本山施

第參號　寄書

宗教家の本領

論說

近角常觀

宗教家の本領は山に入りて復た山を出で俗を出て、再び俗に入るにあり。蓋し此般の言語世人屢之を口にすと雖其眞意を悟了するもの洵に鮮しとなす、況んや之を身に行ふに至りては頗る至難とする所、千百載にして始めて其人あり、後世稱して開宗者となし、其高風を追慕し欽仰措かざる所のものなり。然れども世の所謂宗教家を以て自ら任ぜんとする者、其芳躅を追　せずして可ならむや。

宗教家とし　第一の資格は眞摯なる性情を有するにあり、此の性情たるや眞正の宗教家の一生を通じて終始せるものなり、其の初めて一たび事に觸れ、胸中炎々燃るが如きの熱情、抑ゆんと欲して抑ゆべからざるものあるや、卒然として起つ、其行くや疾風の如く、其動くや雷霆の如く、一たび定るや、毅然として動かざる泰山の如く、坦然として平かなる太湖の如し。世人の所謂眞面目なるもの、眞正の宗教家に於て始めて之を見る。蓋し古來宗教家の爲す所、世の滔々者流より之を望さば、固に常軌を軼するの行動を以て目すべきもの鮮しとせず。而かも宗教家自家の精神を以て之を見ば、實に是當然の事、此の如く爲さずんば他に爲すべきの道を見ざる者、一言以て之を蔽へば、彼は爲さんと欲し而して後爲すにあらず、眞摯なる性情は其人を驅りて、此く爲さゞる可からざらしむるなり。釋尊萬乘の儲位にありて、一たび生老病死の相を見給ふや、決然夜に乘じて王宮を遁れ給ふ所以の者、當時太子の胸中になる性情は、遂に太子をして、晏然座に安

●第一号（一八九六年一〇月）

本號目次

- 教界時言發行の趣旨
- 特別寄書　大谷派内の有志者に檄す　稻葉昌丸
- 論說　教界革新の時機及性質　清澤滿之
- 教學資金に就て
- 寄書　大谷派の有志者に望む所あり澤柳政太郎
- 大谷派の責任
- 雜錄
  - 教界時事
  - 佛教各宗管長懇親會○宗教家懇談會○臺灣帝教の景況○撰擧の紛議○韓僧の來遊
  - 派内近事
  - 大谷派負債の現況○今川滔葉兩氏の辭任に就て○教學資金積立の一法○安居試驗と教學資金募集○助勤會○「大谷派の將來如何」を讀みて

社告

一成へく多く大谷派内の人々に余輩志の在る所を知らしめ度候に付本誌御覽濟の上は同派の人に轉貸して閲讀相成候樣御取計被下度候

一他方の情況は本社の最も開知せんと欲する所に候間御手數ながら御通報願上候

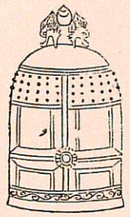
一何人にても寄書は御自由に候得共載否は本社の都合によりて取計ひ又原稿は御返しす不申候

毎月一回發兌

本誌定價　一部　金六錢　廣告料　五號文字十四行宇詰一回金五錢
六部　金卅貳錢
十二部　金六拾錢

編輯人　月見覺了
發行兼印刷人　井上豐忠
京都府下愛宕郡白川村二三三十三番戸
發行所　教界時言社

●第一号（一八九六年一〇月）



●第一六号（一八九八年二月）

明治三十年十月二十九日

教界時言

第拾貳號

第拾貳號目次

- 社說
- 貫徹會を論ず
- 論說
- 既往と將來
- 寄書
- 佛教徒と外教徒とを比し佛教徒に望む
- 雜錄
- 「常業」を讀む
- 派内近事
- 同盟會記事
- 教界時事
- 大谷派の達令と任免

教界時言　第壹號

（明治二十九年十月三十日發行）

教界時言發行の趣旨

宇内の邦國東西其處を異にし、古今其勢に別あり、從て各邦に煥發する所の文化は、亦自ら一樣なる能はず桃紅李白各其特色を表はせり。而も其間に於て、東西兩洋の文化は、各一連の系統を成し、二條の潮流判然として其狀勢を異にするものあるが如し、其一は源を東方に起して次第に西馳し、西歐を越ゑ北米を貫きて遂に我邦に至れるもの、是れ所謂西洋文化の潮流に非ずや。他の一は端を西天に發して漸次に東行し、支那を經、朝鮮を過ぎて我邦に入り、早く我邦文化の一分を撰成せるもの、是れ所謂東洋文化の潮流に非ずや。夫れ這般二條の潮流は、其來るや先後時を異にすと雖も、今や等しく我邦に會し、共に我邦固有の精氣に同化せられて、我大日本帝國の文化となり、漸く將に其光輝を宇内萬邦の上に煥發せんとも、是れ曾世界的統一的文化に非ずや。嗚呼生を此聖代に享け、斯世界的統一的文化の原造者たり發揚者たる者、抑何の幸榮ぞや。余輩帝國民たる者、豈奮發興起せずして可ならんや。然り而して國民各職司あり、内政外交其人あり、殖産工業其人あり、守禦討伐亦其人あり、余輩宗教徒たる者、豈其職司無からんや。余輩が教界時言を發行

第壹號　教界時言發行の趣旨　一

寄書

大谷派の有志に望む所あり

澤柳政太郎

夫れ一たび手を擧ぐれば宏壯なる殿堂忽焉として雲煙に現じ、二たび足を投ずれば絶倫の美質消滅して跡なし、門末の多きと、信徒の富めると、之を今の佛教界に見れば、何の宗派かよく大谷派に匹儔するを

第壹號　寄書　二十

の腐敗」を云々するは單に一般僧侶の敗德をいふに止らずして、別に本山執事者の腐敗を稱するものたるあり。本派は我れ且く之を言はず。大谷派の獨立して其寺院政治を創めてより既に三百年、此間に養成し來れる雜多の弊政、變積し變積して遂に今日に至りぬ。而して今の局に當るものは、生るゝより實に此の溷濁の中にあり、殆ど自ら其溷濁なるを感知せず、胸裡一點の燈火なく、眼孔曾て天下の大勢を

さるを得さるなり。而も曾て二三子の本山改革を唱導せしもの、遂に何等の功を遂ずに至らずして已み近時かの兩堂起築につぐに負債償却の擧を以てし、其一なが局を結ぶや、當路者の驕傲偏私は益加はり、所謂「教學擴張」の根本的經營は空しく混亂の裏に葬られ去らんとす。聞くならく、廉潔誠實なる有志者諸氏は茲に至りてまた共に事を爲すに堪ゑずとなし、袂を拂ふて其職を去り、更に大に旗幟を公

得べき、時勢の推移に應じて布教を方策を講じ、倡教言の途を設けたるものも、亦最も此派を推し其よく社會に出でゝ翔翥するに足り、天下に立ち馳騁するを得べきもの、亦多く此派に存す、而し佛教界に於ける諸般の問題、常に先づ主として本宗に亞る。由來佛教界にあり最も活氣あり最も進歩したりと稱せらるゝもの、必ずしも誇張言には非ざりけり。是れ洵に此宗派が現代の社會に於て主要なる一勢力たるを表彰するもの、其勢力殆ど今時佛教界の全般を蔽ふの觀ありとす。

されど眞宗は一方に於て佛教の勢力を代表するこに、又他方に於て其腐敗をも代表することは非ずや。佛教界の腐敗、嗚呼これ寧ろ茲に言ふの要なんや。而して佛教といふ即ち直に本願寺を想起し本願寺といふ即ち直に其腐敗を想起す。近時世論佛教をいふもの必ず先づ本願寺を稱し、而して其願寺を云々するもの必ず先づ其腐敗を罵らざるなし。是れ實に其外觀の顯々として最もよく世人の眼觸るゝが故なりと雖も、其實狀の亦眞に哀むべきのあるに由るなきを得んや。而も世人が特に「本願

教界時言（きょうかいじげん）

復刻版　全3巻（一八九六年一〇月～一八九八年三月）

体裁　A5判・B5判／上製
総約900頁
※解説・総目次・索引を第1巻巻頭に収録

解説　福島栄寿（大谷大学文学部教授）
推薦　佐賀枝夏文（大谷大学名誉教授）
　　島薗　進（上智大学教授・東京大学名誉教授）

原本提供　大谷大学図書館・西方寺

刊行　2018年4月
揃定価　54、000円＋税
ISBN978-4-8350-7829-8

●関連図書

復刻版　救済　全9巻・別冊1

大谷派慈善協会　発行〔一九一一～一九一九年刊〕
別　冊＝解説（佐賀枝夏文）・総目次・索引
菊判・上製／総4、888頁
推　薦　長谷川匡俊・吉田久一
揃定価　163、000円＋税

真宗大谷派の僧・大草慧実が設立した福祉団体＝大谷派慈善協会の機関誌である。貧困者、失業者、無宿者の救済、出獄者の社会復帰事業、被差別部落の改善、禁酒運動、ハンセン病患者への対策、そして児童保護事業、知的障害児教育など豊富な記事が掲載されている。仏教社会福祉の原点である本誌は、近年高まってきた仏教社会福祉の研究にとって必備の資料である。

復刻版　児童と宗教　全15巻・別冊1

真宗大谷派（大谷派本願寺社会課）発行
〔一九二二～一九三七年刊〕
別　冊＝解説（佐賀枝夏文）・総目次・索引
A5判・B5判／上製／総7、822頁
推　薦　長谷川匡俊・谷川　穣
揃定価　285、000円＋税

本誌は、雑誌『救済』の啓蒙活動を引き継ぐものとして、大谷派本願寺社会課主事の武内了温が事業として推進し、宗教と社会の接点として隆盛をきわめた「日曜学校」の機関誌である。教育勅語を背景とした宗教・児童福祉問題の考察、児童文学、キリスト教等への言及もみられ、また子どもの道徳教育や日曜学校の教案・カリキュラムも掲載されている。「教育と宗教」のあり方を示す重要資料である本誌を、後継誌『青少年と宗教』と合わせて復刻。

表示価格は、全て税別

不二出版
〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL　03-5981-6704
FAX　03-5981-6705
振替　00160-2-94084